

編集後記

遊星人編集幹事の野津翔太です。今回の遊星人も、連載：火の鳥「はやぶさ」未来編からリュウグウ粒子のキュレーションに関する記事2本立てのほか、金星あかつき・火星MMX・海外研究記など、充実したラインナップです。引き続き奮っての記事投稿、お待ちしております。

毎年4月は日本においては新年度・新学期の始まりという事で、多くの皆さまにとって忙しい時期・新たな挑戦の時期かと思います。そして私を含め研究活動の一環でアルマ望遠鏡(アタカマ大型ミリ波サブミリ波干渉計)を用いた観測を行う研究者にとっては、年に1度のプロポーザル(観測提案書)申請の時期でもあります。(今年Cycle 12の提出締切は4月24日協定世界時15:00でした) アルマ望遠鏡は南米チリ北部・標高5000mのアタカマ砂漠に建設されたパラボラアンテナ66台からなる電波干渉計で、欧州・北米・東アジア(日本・韓国・台湾)と建設地のチリを合わせた22の国と地域が連携して運用している巨大電波望遠鏡になります。そのため日本国内にとどまらず世界各地の研究者がこの4月同様の慌ただしい状況に置かれることもあり、分野全体の一大行事となっています。

国内外の共同研究者と議論しつつ、先行研究や自分達のこれまでの解析データ・理論計算などをもとに観測目的・計画を練り上げ、それを限られたスペースの科学説明書(regular proposalの場合、A4で

4ページ)と別途作成する技術説明書に落とし込む一連の作業。そして科学的背景を踏まえた壮大な“夢”を、限られた観測時間・設定の中で現実的に実現可能な観測目的・計画に落とし込む必要性。大変な作業であると同時に、近年の競争倍率の高まりもあって(昨年のCycle 11では1700本を超える観測申請書が提出され、倍率は観測時間ベースで7.4倍)、残念ながら採択されなかった悲しみを感じることも多いです。ですが、観測提案書が採択された際の喜びや、観測データが届いた後の解析・議論・論文化の楽しさを踏まえると、今年も頑張ろうという気持ちになります。この編集後記を執筆している時点(2025年5月2日)で今年の提案書提出はすでに終了、数ヶ月後の審査結果発表を待ちつつ、次に向けたデータ解析・議論を進める時期となります。

なお、アルマ望遠鏡を用いた観測研究について詳しく知りたい方は、2019年9月号・12月号掲載の特集「ALMAで迫る惑星科学」の記事をはじめとして、遊星人にも多数の関連記事が掲載されておりますので、ぜひ一度ご覧ください。また時を同じくして、アルマ望遠鏡計画にもつながる数多くの科学面・技術面の成果を長年上げてきた国立天文台 野辺山宇宙電波観測所が舞台の一つとなった某探偵アニメ映画も公開されています。長年のファンかつ電波天文学に関わる身として、感慨深い今日この頃です。(編集幹事 野津翔太)